

## 研究ノート

### 表記からみた国語音韻の問題

——サとシャについて——

木村 澄子

安原貞室は、その著『かたこと』<sup>1</sup>の自序において、一般大衆の言葉が変化し、しかもそれが知識人の子弟にまでおよんでいったということを明らかにしてくれている。それら、貞室が「か

例あって、それらは特に古語と思われるいたとも考えられないので、なぜ異表記なのか、意識的な書きわけの理由はみつからない。

たこと」としてとらえた現象の中には、直音と拗音の混同を指摘したものが多く、とりわけ、サとシャとの混同の指摘がめだっている。これは当時の現実の発音の観察からの指摘であるとともに、貞室自身の意識を規範的なものとして提出しているのだが、それをあらわす表記法は、必ずしも一貫したものとはいえない部分を含んでいる。そしてそこには書きわけたとおぼしい痕跡も、その理由もみつからないのである。かれの書きわけは、古語と思われるもの、古典からの引用には直音表記をとり、拗音によむべしとしているが、それ以外には拗音表記をとる、というもののだが、地の文に直音で表記されているものが五

かんなどよみ、表記と音韻が、必ずしも一対一対応はしないことを指摘している貞室としては、別段異表記という意識はなかったかもしれないが、ではなぜ、異表記があらわれるのだろうか。こればかりでなく、他の規範書『毛吹草』や『蜷縮涼鼓集』にも、この種の異表記が散見し、しかも書によって微妙に異なっている。一般の読み物ではどうかといえは、表記の全般にわたって、*phonetic spelling* ともいえるような現象がみられるが、サとシャとに関する限りにおいては、貞室の指摘とある程度の相関関係をみいだすことができるものがある。

萬治三年から元禄十四年までの『歌舞伎評判記』<sup>2</sup>をみると、

次のような点が特徴的である。

1 チャと混乱するジャは、ザとはあらわれない。

上手 せうず じやうず ちやうず

また、ザと表記されることのあるジャはチャとはあらわれない。

ざみせん じゃみせん

2 シャ表記が多く、サ表記は少ないか、全くない語が多い。

サ表記のなかったもの

しやれ じやれ

しやべる

3 サとシャの書きわけは一般的にはみられないが、ハ役者口

三味線Vでは

しやみせん 10例

さみせん 1例

口さみせん 4例

と、かたよりがみられる。

語によって表記の安定度が異なっているのは、語によってきこえにも、明瞭さが異なっているのと同じだろうが、きこえの明瞭さは直接に表記の安定と結びつくわけではない。しかし、貞室のいう、サというべきなのにシャといわれる類と、どちらでいってもいい類(草履)と、シャというべきなのにサといわ

れる類とでは、鯉のようにシャケ表記があらわれないものもあったが、確かに最初の類が多く、傾向として、シャにかたむく様相をみせている。

シャ表記の増加は同時に第三の類のサ表記をほとんど追放していることでもある。この場合は表記の安定と重なっているのだが、こうみてくると、ハかたことVにあらわれている状態より古いものと思われる貞室のことにより、現在は拗音語が少なくなっており、かれ自身は拗音で転訛する例を多く指摘して、表記にもそれがみられるのだから、当時は、その前後のいずれもより、同一の語にあらわれる拗音の頻度も、語によって拗音と意識されるものも、多かつたといえるのではないだろうか。そしてその内容は、直音で表記されていても拗音である。という拗音の直音的表記という認識が確認され、また直拗の対立が意味のちがいつながる場合がでてきていることから、やつとシャとサとは国語の音韻体系においてその位置を確立するのではないだろうか。

『万葉集』では同じ位置を占めると思われる佐と沙が、『在唐記』<sup>4</sup>では異なる梵音を示すために用いられ、その「本郷佐」「本郷沙」「大唐沙」はそれぞれ者・奢・沙とあらわされるようになり、『梵字形音義』<sup>5</sup>に至ると「本郷佐」の部分に「者或左」とあてるといように、時代を越えて、真仮名にも、音注

にも混乱があらわれている。それはカタカナの世界でも『反音作法』<sup>6</sup>にサとシャについての問いがあり、かな文学ではそれぞれの写本の内部で、また同じ系統と異系とをとわず、サ・シャ両表記が、頻度の差こそあれ出現している。しかし、草子のような語がシャウシとあらわされることはない。この中で注目すべきは、先にあげた1の条件に反するものがみられることである。

『枕草子』<sup>7</sup>の写本中、最も古いかたちを保存しているといわれる三卷本には、菖蒲・精進・障子・装束・淑景などはほとんどサであらわれているのに、能因本ではシャ表記がみえ、前田本ではさらに増加し、ほぼ半数を占めている。

しかしこれらはみな字音語で、評判記にみえるものとは異質である。共通しているのは時代をくだるにつれてシャ表記がふえ、かつシャ表記に固定するものとサ表記に固定するものがはっきりしてくることである。その固定の仕方には遅速があり、濁音の方が清音より遅くまでサ表記を残し、逆にサに固定するものでは語頭より語中に早く新しい表記があらわれてくる。

これらの広範で永続的な表記のゆれは音韻のゆれを反映するものであるが、はじめからサとシャとに相当する二つの音韻が存在してその間でゆれていたのではなく、片方は外国語の原音を理論的にあらわそうとした委音であり、かな文に字音語がも

のもののしい委音をともなうかたちでまざりこんでも抵抗がないまでに日本化した段階でも、実際に言いわけ、聞きわけは困難<sup>8</sup>だったろう。現実に別個の音韻として認識され、言いわけ、聞きわけが一般的に可能になるのは江戸前期あたりからで、今日、鮭が「さけ」と書かれるが、シャケといわれるのは、サが口蓋性を長く保有して、シャと分離しがたかったことの最後のあかしではないだろうか。

注1 『かたこと』慶安三年 荒木利兵衛刊本(東大図書館蔵)  
2 『歌舞伎評判記集成』第一・二巻 (江戸版のものを除く)

3 『上代仮名遣の研究』(大野晋) 二七八頁。『万葉集

講座』第三卷「万葉集の音韻」(馬淵和夫) 一七四頁。

但し、『日本書紀』神代上卷三丁オ(早大図書館蔵)に、沙<sub>レ</sub>須の例がある。

4 『在唐記』(『日本大蔵経』宗典部天台宗密教章(円仁)疏一、八五七頁)『日本韻学史の研究』(馬淵和夫)

5 『梵字形音義』(明覚) 比叡山文庫蔵

6 『反音作法』(明覚) 比叡山文庫蔵 五丁ウ

7 『校本枕草子』(田中重太郎編)

8 『日本大文典』(ロドリゲス) 高世 chixa の項。

9 『音聲學』(服部四郎) 一六〇頁。

## 訂正とおわび

前号に下記のような校正上の誤りがありました。おわびして訂正致します。

誤	正
表紙 韓・日敬語の助動詞について 「けしきころ」考	→ 韓・日尊敬語の助動詞について → 「けしきころ」考 → 上代における形容詞「けし」について
P. 1 下l. 11 rokwr	→ rokwr
P. 2 上l. 1 cwki	→ cwki
l. 4 wi	→ ui
l. 5 twt	→ tuwt
l. 9 twi	→ twui
l. 11 nohw	→ nohw
l. 16 sim	→ sin
下l. 7 rar-pyæŋ-cæŋ	→ rar-pyæŋ-cæŋ
P. 4 上l. 17 paŋ-a	→ paŋ-e
下l. 2 kunwn	→ kunwn
" wn	→ un
l. 5 che	→ che
l. 14 kyasyə	→ kyəsyə
l. 15 syə	→ syə
" kya	→ kyə
P. 5 下l. 1 hamyaŋwi	→ hamyaŋwi
" kyesi	→ kyəsi
P. 8 下l. 19 異	→ 異
P. 9 下l. 8 ⑨⑥	→ ⑥⑨
P. 11 上l. 1 乃   異	→ 乃 異
P. 12 上l. 13 なかったでは	→ なかったのでは
P. 17 下l. 13 直首的	→ 直音的
(仮) P. 21. 4 春秋國語	→ 春秋國語
P. 7 右l. 28 賈逵伝	→ 賈逵伝
P. 39 右l. 8 白孔六帆	→ 白孔六帖
P. 53 左l. 8 淮陰侯列伝	→ 淮陰侯列伝